

# 地域紛争・難民問題



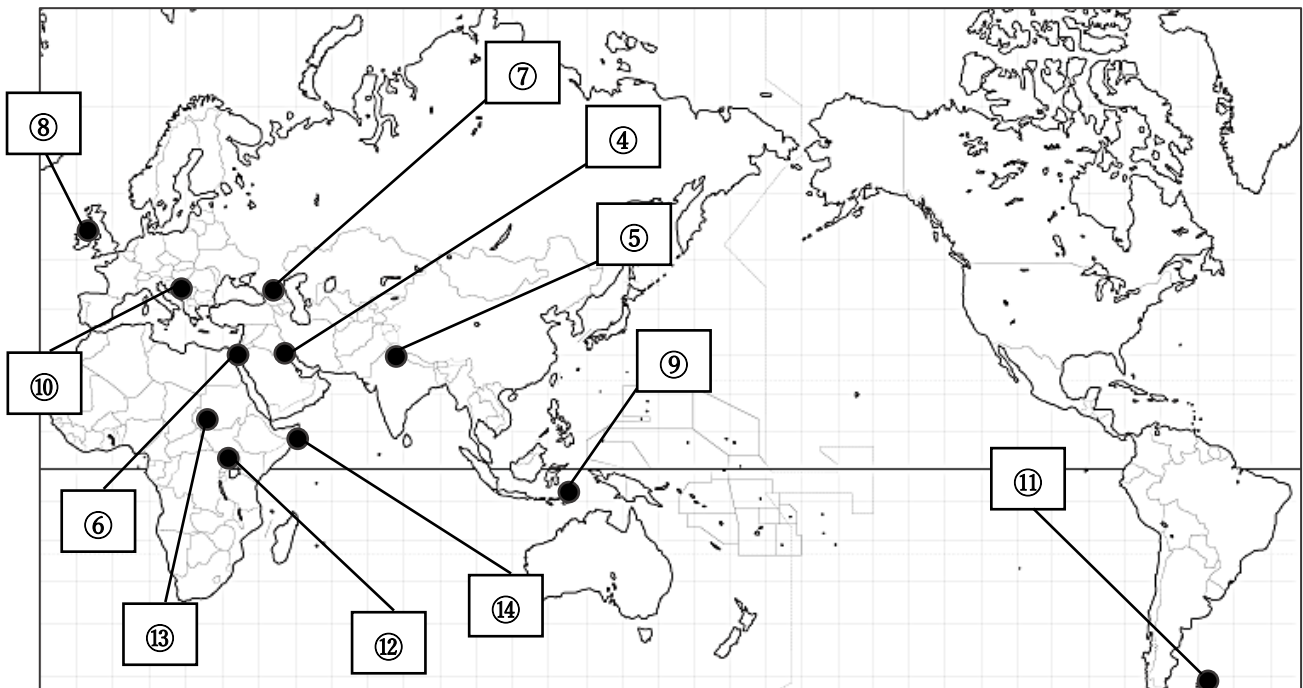
## (i) 地域紛争

### ■ 地域紛争の背景

冷戦終結後、これまで米ソの下で抑え込まれていた争いが噴出し、民族間や宗教上の歴史的対立、経済格差、領土問題などを起因として紛争が生じた。これを**地域紛争**という。

入試においては、紛争が起こった場所・紛争の対立構図をセットで抑える必要がある。

主要な紛争については●で地図上に示した。以下の番号が太字になっている紛争と照らし合わせて覚えよう。



### ■ 地域紛争の事例

#### (A) 米ソが関与した戦争

	戦争	内容
①	<b>米</b> ベトナム戦争介入(1965～)	ベトナムの内戦にアメリカが介入
②	<b>ソ</b> アフガニスタン侵攻(1979～)	政治が混乱し、国内がアメリカ寄りになることを危惧したソ連が、アフガニスタンへ軍事介入
③	<b>米<sup>1</sup></b> (1991)	クウェートに一方的に侵攻した <b>イラク</b> VS それを撤退させるために出動した <b>多国籍軍(米中心)</b>
④	<b>米<sup>2</sup></b> (2003)	大量の破壊兵器保有が疑われた <b>イラク</b> VS イラクの兵器保有やテロ組織との繋がりをもとに侵攻した <b>多国籍軍(米・英中心)</b>

(B) 宗教的対立を背景とした紛争

⑤	3 (印パ紛争)	インドとパキスタンの国境にあるカシミール地方の領土帰属をめぐる争い。 <b>イスラム教徒 VS ヒンドゥー教徒</b>
⑥	4 (1948～)	パレスチナ地方の居住権を争った紛争。[5] ]建国に伴い、 祖国に帰ってきた それまでパレスチナで暮らしていた <b>ユダヤ人(ユダヤ教徒) VS アラブ人(イスラム教徒)</b>

(C) 独立をめぐる紛争

⑦	6 (1994～)	[7] ]からの独立を求める 有益な領土のため阻止したい <b>チェチェン共和国 VS ロシア軍</b>
⑧	<b>北アイルランド紛争</b>	イギリスからの分離独立を目指す 英国への帰属を主張する <b>少数派(カトリック系) VS 多数派(プロテスタント系)</b>
⑨	8	東ティモールを制圧していた インドネシアからの独立を目指す <b>インドネシア VS 東ティモール&amp;国連多国籍軍</b> 1999年住民投票が実施され、2002年5月に独立。191番目の国連加盟国に。
⑩	[9] ]内戦 (1990年代)	*10 【発端】独立をめぐる内戦が発生 激しい内戦をしていた それを食い止め平和実現を目指す <b>セルビア人勢力 VS NATO軍(国連の協力)</b> 和平合意(1995) → <b>モンテネグロ</b> 独立(2006) = 192番目の国連加盟国 *11 【発端】セルビアのコソボで、独立をめざす動き コソボ勢力を軍事制圧した それを食い止め平和実現を目指す <b>新ユーゴスラビア(セルビア系) VS NATO軍(米主導)</b>

(D) その他、領土問題や植民地問題が起因となった紛争

⑪	12 (1982)	南大西洋のフォークランド島の領有権を巡り戦った <b>アルゼンチン VS イギリス</b>
⑫	13 (1990年頃～)	ベルギーの植民地政策によってルワンダとして独立後、 優遇されてきた 政治の中心を担っていた <b>ツチ族(少数派) VS フツ族(多数派)</b>
⑬	14	独立を求める 南部の黒人を差別してきた <b>南スーダン(スーダン南部) VS スーダン政府側(北部)</b> 2011年に独立。(193番目の国連加盟国) まだ不安定な治安でPKOが派遣されている。日本も参加。
⑭	15 (1988～)	<b>独裁政治 vs 反発する反政府勢力 vs 国連PKOの介入</b> ▶この内部でも紛争

(E) 独立を目指す少数民族

⑮	16	<b>民族</b> 中国からの独立を目指す。
⑯	17	<b>民族</b> 中国からの独立を目指す。多くがトルコ系のイスラーム教徒。
⑰	18	<b>民族</b> トルコ・イラン・イラク・シリアなどに居住する少数民族。独自の国家を求める。
⑱		<b>スコットランド</b> 2014年、イギリスからの独立を目指すため住民投票→反対多数で否決
⑲		<b>カタルーニャ地方</b> 2017年10月1日独立を問う住民投票→賛成多数で可決→中央政府との対話へ

## Column 引き裂かれたワールドカップの夢 ～旧ユーゴスラビア代表 ストイコビッチ～

名古屋グランパスの選手・監督としても活躍したストイコビッチ。彼はユーゴスラビア代表のエースとして世界的に有名な選手だった。彼を中心とした代表チームは、87年のワールドユースで優勝、90年のW杯でベスト8。年齢的に全盛期を迎える次の'94年大会は、優勝候補間違い無しの“黄金世代”と言われた。

しかし、その夢は引き裂かれる。当時ユーゴスラビアは様々な民族・宗教が入り交じっていて、独立をめぐる内戦が行なわれていた。それに対し、国連は制裁として、ユーゴ代表に国際試合の出場禁止を命じた。

結果、'92年、'96年の欧州選手権、'94年のW杯アメリカ大会に出場できなかった。

この連絡を受けたとき、あまりの悔しさに涙が止まらず、言葉が出なかったそうである。

悲劇としか言いようが無い人生を歩んできた彼が、

第二のサッカー選手人生として選んだ場所が日本だった。

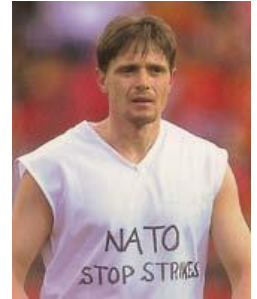
ピクシー（＝妖精という意味）の愛称で親しまれた彼は、

日本中のサッカーファンを魅了し、

2001年に惜しまれながら日本で選手生命の幕を閉じた。



△名古屋グランパスの監督として6年間過ごす



△「NATO空爆を止めろ」試合後に抗議行動(1999)

### + α 旧ユーゴスラビア内戦

かつてのユーゴスラビアは、「7つの国境・6つの共和国・5つの民族・4つの言語・3つの宗教・2つの文字・1つの国家」といわれ、複数の民族が共存するモザイク国家だった。

冷戦終結に伴い、91年～92年に各共和国が次々と独立を宣言。

この民族間の対立が表面化したことで、激しい内戦に発展し、現在では7つの国家に分裂している。



## (ii) 難民問題

**難民**：人種・民族・宗教・政治的意見の相違などから、外国に逃れ本国の保護を受けられない人々のこと。亡命者(≒難民)も含まれる。

### 国際的な取組

★<sup>[19]</sup> ]：1951年の「**難民の地位に関する条約**」と1967年の「**難民の地位に関する議定書**」の二つをあわせて呼ばれる。 ※経済的理由によって祖国を離れた人々や**国内避難民**は対象外

★<sup>[20]</sup> ]**事務所 (UNHCR)**：国連で国際的な取組を実施する機関  
※こちらは国内避難民も支援の対象としている。

★<sup>[21]</sup> ]原則：迫害の恐れがある国・地域に追放・送還してはならないという原則

### 日本の取組

1970年代 難民の受入れに消極的→国際社会から非難

→ **難民条約** 加入 → 1982年発効

→<sup>[22]</sup> ]**及び難民認定法 (入管法)** に改正

※ただ、難民認定の審査が厳しく他の先進国と比べて受入が少ない

### (iii) 人種差別・テロリズム

#### アメリカ

- ・1950～60年代 黒人の地位向上をめざす動き = [23]
- 1964 人種差別撤廃をうたった**公民権法**が成立
- ・2009 [24] ]がアメリカで初めての黒人大統領となる



#### 南アフリカ

- ・白人が黒人に対して人種隔離政策を実施 ([25]) →1991 廃止

#### Column🗨️ 虹の国を目指した男 ～ネルソン・マンデラ氏のメッセージ～

**「黒人も白人も胸を張って歩ける、尊厳が守られる社会を築こう。目指すのは平和な虹の国だ。」**

肌の色の異なる人々が対立を乗り越え、共存する社会を目指したマンデラ氏。その理念は、激しい人種差別との闘いの中から生まれたものだった。少数派の白人による政権の下、参政権も与えられず、抵抗運動は徹底的に弾圧された。在学中、彼はアパルトヘイト撤廃を求める運動に参加したが、1962年、マンデラ氏は逮捕され、終身刑の判決を受ける。45歳の時だった。27年余りに及んだ獄中生活の中で、彼は怒りの感情が無意味であると悟り、白人の刑務官と心を通わすようになった。獄中生活の末に姿を現した彼は、怒りに満ちたかつての面影はなかった。

**「前進しよう！ 自由と正義への歩みは後戻りしない。」**

1994年、マンデラ氏はすべての人種が参加した選挙で圧倒的な勝利を収め、大統領に就任した。初の黒人による政権誕生に沸く黒人たち。一方、これまで権力を握っていた白人の間には、報復への恐怖が高まった。この時マンデラ氏が打ち出したのが、赦（ゆる）しによって人種間の融和を目指す試みだった。彼が特に力を入れたのが過去のさまざまな人権侵害を明らかにする「真実と和解委員会」である。しかし委員会では、懲罰や復しゅうを目的としないことが明確にされ、重大犯罪の疑いがあっても一定の条件を満たせば罪に問わないとした。

**「被害者にとって、加害者への懲罰を放棄することは受け入れがたいでしょう。」**

**しかし、平和のためにはどうしても必要なことなのです。」**

憎しみの連鎖を自らで断ち切ることは、簡単ではなかったはずだ。それを乗り越えてでも、あらゆる人々が共存する虹の国を目指した彼は、その揺るぎない信念を、生前こう記している。

**“肌の色や育ち、信仰の違いを理由に他人を憎むように生まれつく人などいない。人は憎むことを学ぶのだ。もし憎むことを学べるなら、愛することも学べる。愛は憎しみより自然に人の心に届くはずだ。”**（自伝『自由への長い道』）



- ・**テロリズム**…殺人や破壊などの暴力行使によって、第三者や一般市民に恐怖を与え、自らの勢力を誇示し、政治的目標を達成しようとする行為

(例) **アメリカ同時多発テロ**(2001.9.11) → 反米的な宗教原理主義勢力**アルカーイダ**が起こした  
**イスラーム国(IS)によるテロ行為**(2015 パリ同時多発テロなど) → イスラームスンニ派の過激派組織

# 地域紛争・難民問題



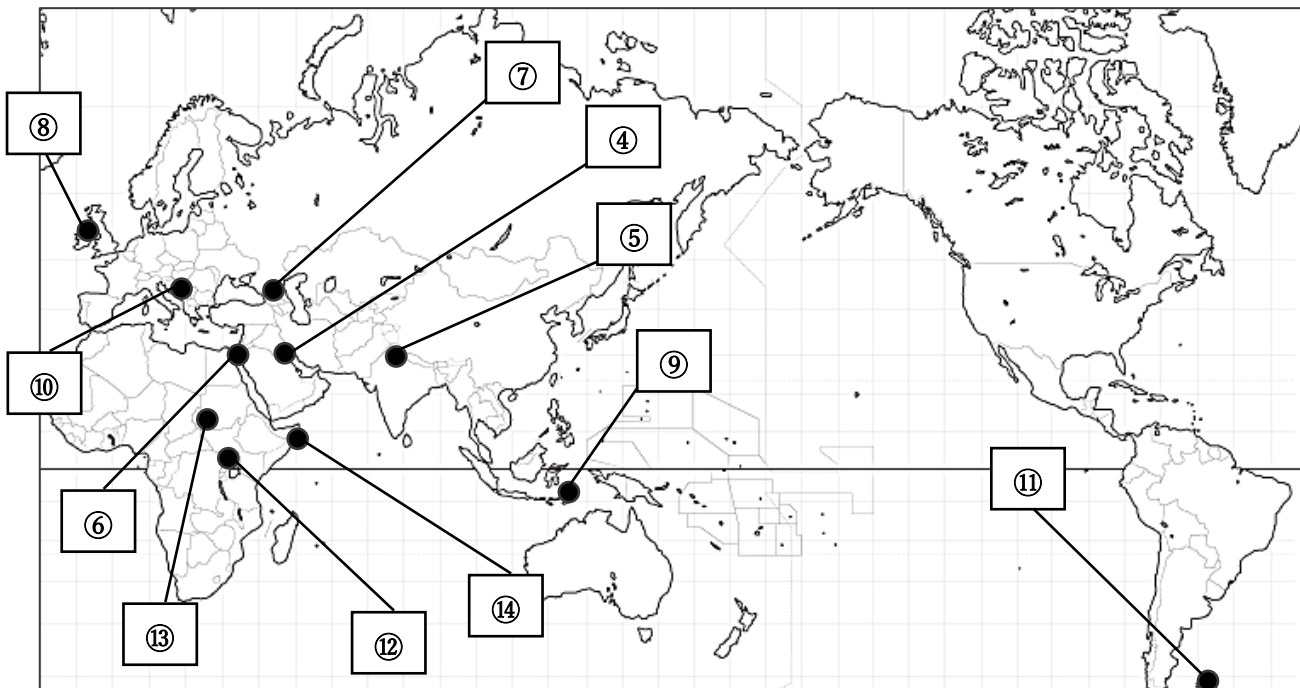
## (i) 地域紛争

### ■ 地域紛争の背景

冷戦終結後、これまで米ソの下で抑え込まれていた争いが噴出し、民族間や宗教上の歴史的対立、経済格差、領土問題などを起因として紛争が生じた。これを**地域紛争**という。

入試においては、紛争が起こった場所・紛争の対立構図をセットで抑える必要がある。

主要な紛争については●で地図上に示した。以下の番号が太字になっている紛争と照らし合わせて覚えよう。



### ■ 地域紛争の事例

#### (A) 米ソが関与した戦争

	戦争	内容
①	<b>米</b> ベトナム戦争介入(1965～)	ベトナムの内戦にアメリカが介入
②	<b>ソ</b> アフガニスタン侵攻(1979～)	政治が混乱し、国内がアメリカ寄りになることを危惧したソ連が、アフガニスタンへ軍事介入
③	<b>米</b> <sup>1</sup> <b>湾岸戦争</b> (1991)	クウェートに一方的に侵攻した <b>イラク</b> VS それを撤退させるために出動した <b>多国籍軍(米中心)</b>
④	<b>米</b> <sup>2</sup> <b>イラク戦争</b> (2003)	大量の破壊兵器保有が疑われた <b>イラク</b> VS イラクの兵器保有やテロ組織との繋がりを利用しに侵攻した <b>多国籍軍(米・英中心)</b>

(B) 宗教的対立を背景とした紛争

⑤	3	<b>カシミール紛争</b> (印パ紛争)	インドとパキスタンの国境にあるカシミール地方の領土帰属をめぐる争い。 <b>イスラム教徒 VS ヒンドゥー教徒</b>
⑥	4	<b>パレスチナ紛争</b> (1948～)	パレスチナ地方の居住権を争った紛争。[ <sup>5</sup> <b>イスラエル</b> ]建国に伴い、 祖国に帰ってきた <b>ユダヤ人(ユダヤ教徒)</b> VS それまでパレスチナで暮らしていた <b>アラブ人(イスラム教徒)</b>

(C) 独立をめぐる紛争

⑦	6	<b>チェチェン紛争</b> (1994～)	[ <sup>7</sup> <b>ロシア</b> ]からの独立を求める <b>チェチェン共和国</b> VS 有益な領土のため阻止したい <b>ロシア軍</b>
⑧		<b>北アイルランド紛争</b>	イギリスからの分離独立を目指す <b>少数派(カトリック系)</b> VS 英国への帰属を主張する <b>多数派(プロテスタント系)</b>
⑨	8	<b>東ティモール独立運動</b>	東ティモールを制圧していた <b>インドネシア</b> VS インドネシアからの独立を目指す <b>東ティモール &amp; 国連多国籍軍</b> 1999年住民投票が実施され、2002年5月に独立。191番目の国連加盟国に。
⑩		[ <sup>9</sup> <b>旧ユーゴスラビア</b> ]内戦 (1990年代)	* <sup>10</sup> <b>ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争</b> 【発端】独立をめぐる内戦が発生 激しい内戦をしていた <b>セルビア人勢力</b> VS それを食い止め平和実現を目指す <b>NATO軍(国連の協力)</b> 和平合意(1995) → <b>モンテネグロ</b> 独立(2006) = 192番目の国連加盟国
			* <sup>11</sup> <b>コソボ紛争</b> 【発端】セルビアのコソボで、独立をめざす動き コソボ勢力を軍事制圧した <b>新ユーゴスラビア(セルビア系)</b> VS それを食い止め平和実現を目指す <b>NATO軍(米主導)</b>

(D) その他、領土問題や植民地問題が起因となった紛争

⑪	12	<b>フォークランド紛争</b> (1982)	南大西洋のフォークランド島の領有権を巡り戦った <b>アルゼンチン VS イギリス</b>
⑫	13	<b>ルワンダ内戦</b> (1990年頃～)	ベルギーの植民地政策によってルワンダとして独立後、 優遇されてきた <b>ツチ族(少数派)</b> VS 政治の中心を担っていた <b>フツ族(多数派)</b>
⑬	14	<b>ダルフル紛争</b>	独立を求める <b>南スーダン(スーダン南部)</b> VS 南部の黒人を差別してきた <b>スーダン政府側(北部)</b> 2011年に独立。(193番目の国連加盟国) まだ不安定な治安でPKOが派遣されている。日本も参加。
⑭	15	<b>ソマリア内戦</b> (1988～)	<b>独裁政治 vs 反発する反政府勢力 vs 国連PKOの介入</b> ▶この内部でも紛争

(E) 独立を目指す少数民族

⑮	16	<b>チベット</b> 民族	中国からの独立を目指す。
⑯	17	<b>ウイグル</b> 民族	中国からの独立を目指す。多くがトルコ系のイスラーム教徒。
⑰	18	<b>クルド</b> 民族	トルコ・イラン・イラク・シリアなどに居住する少数民族。独自の国家を求める。
⑱		<b>スコットランド</b>	2014年、イギリスからの独立を目指すため住民投票→反対多数で否決
⑲		<b>カタルーニャ地方</b>	2017年10月1日独立を問う住民投票→賛成多数で可決→中央政府との対話へ

## Column📢 引き裂かれたワールドカップの夢 ～旧ユーゴスラビア代表 ストイコビッチ～

名古屋グランパスの選手・監督としても活躍したストイコビッチ。彼はユーゴスラビア代表のエースとして世界的に有名な選手だった。彼を中心とした代表チームは、87年のワールドユースで優勝、90年のW杯でベスト8。年齢的に全盛期を迎える次の'94年大会は、優勝候補間違い無しの“黄金世代”と言われた。

しかし、その夢は引き裂かれる。当時ユーゴスラビアは様々な民族・宗教が入り交じっていて、独立をめぐる内戦が行なわれていた。それに対し、国連は制裁として、ユーゴ代表に国際試合の出場禁止を命じた。

結果、'92年、'96年の欧州選手権、'94年のW杯アメリカ大会に出場できなかった。

この連絡を受けたとき、あまりの悔しさに涙が止まらず、言葉が出なかったそうである。

悲劇としか言いようが無い人生を歩んできた彼が、

第二のサッカー選手人生として選んだ場所が日本だった。

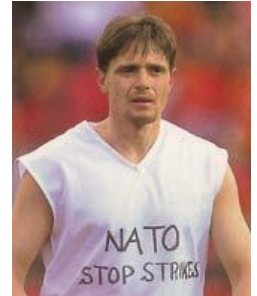
ピクシー（＝妖精という意味）の愛称で親しまれた彼は、

日本中のサッカーファンを魅了し、

2001年に惜しまれながら日本で選手生命の幕を閉じた。



△名古屋グランパスの監督として6年間過ごす



△「NATO空爆を止めろ」試合後に抗議行動(1999)

### + α 旧ユーゴスラビア内戦

かつてのユーゴスラビアは、「7つの国境・6つの共和国・5つの民族・4つの言語・3つの宗教・2つの文字・1つの国家」といわれ、複数の民族が共存するモザイク国家だった。

冷戦終結に伴い、91年～92年に各共和国が次々と独立を宣言。

この民族間の対立が表面化したことで、激しい内戦に発展し、現在では7つの国家に分裂している。



## (ii) 難民問題

**難民**：人種・民族・宗教・政治的意見の相違などから、外国に逃れ本国の保護を受けられない人々のこと。亡命者(≒難民)も含まれる。

### 国際的な取組

★<sup>[19]</sup> **難民条約** ]：1951年の「**難民の地位に関する条約**」と1967年の「**難民の地位に関する議定書**」の二つをあわせて呼ばれる。 ※経済的理由によって祖国を離れた人々や**国内避難民**は対象外

★<sup>[20]</sup> **国連高等難民弁務官** ]事務所 (UNHCR)：国連で国際的な取組を実施する機関  
※こちらは国内避難民も支援の対象としている。

★<sup>[21]</sup> **ノン・ルフールマン** ]原則：迫害の恐れがある国・地域に追放・送還してはならないという原則

### 日本の取組

1970年代 難民の受入れに消極的→国際社会から非難

→ **難民条約** 加入 → 1982年発効

→<sup>[22]</sup> **出入国管理** ]及び**難民認定法 (入管法)** に改正

※ただ、難民認定の審査が厳しく他の先進国と比べて受入が少ない

### (iii) 人種差別・テロリズム

#### アメリカ

- ・ 1950～60年代 黒人の地位向上をめざす動き = [23 **公民権運動** ]  
→ 1964 人種差別撤廃をうたった**公民権法**が成立
- ・ 2009 [24 **バラク・オバマ** ]がアメリカで初めての黒人大統領となる



#### 南アフリカ

- ・ 白人が黒人に対して人種隔離政策を実施 ([25 **アパルトヘイト** ]) → 1991 廃止

#### Column🗨️ 虹の国を目指した男 ～ネルソン・マンデラ氏のメッセージ～

**「黒人も白人も胸を張って歩ける、尊厳が守られる社会を築こう。目指すのは平和な虹の国だ。」**

肌の色の異なる人々が対立を乗り越え、共存する社会を目指したマンデラ氏。その理念は、激しい人種差別との闘いの中から生まれたものだった。少数派の白人による政権の下、参政権も与えられず、抵抗運動は徹底的に弾圧された。在学中、彼はアパルトヘイト撤廃を求める運動に参加したが、1962年、マンデラ氏は逮捕され、終身刑の判決を受ける。45歳の時だった。27年余りに及んだ獄中生活の中で、彼は怒りの感情が無意味であると悟り、白人の刑務官と心を通すようになった。獄中生活の末に姿を現した彼は、怒りに満ちたかつての面影はなかった。

**「前進しよう！ 自由と正義への歩みは後戻りしない。」**

1994年、マンデラ氏はすべての人種が参加した選挙で圧倒的な勝利を収め、大統領に就任した。初の黒人による政権誕生に沸く黒人たち。一方、これまで権力を握っていた白人の間には、報復への恐怖が高まった。この時マンデラ氏が打ち出したのが、赦（ゆる）しによって人種間の融和を目指す試みだった。彼が特に力を入れたのが過去のさまざまな人権侵害を明らかにする「真実と和解委員会」である。しかし委員会では、懲罰や復しゅうを目的としないことが明確にされ、重大犯罪の疑いがあっても一定の条件を満たせば罪に問わないとした。

**「被害者にとって、加害者への懲罰を放棄することは受け入れがたいでしょう。」**

**しかし、平和のためにはどうしても必要なことなのです。」**

憎しみの連鎖を自らで断ち切ることは、簡単ではなかったはずだ。それを乗り越えてでも、あらゆる人々が共存する虹の国を目指した彼は、その揺るぎない信念を、生前こう記している。

**“肌の色や育ち、信仰の違いを理由に他人を憎むように生まれつく人などいない。人は憎むことを学ぶのだ。もし憎むことを学べるなら、愛することも学べる。愛は憎しみより自然に人の心に届くはずだ。”**（自伝『自由への長い道』）



- ・ **テロリズム**…殺人や破壊などの暴力行使によって、第三者や一般市民に恐怖を与え、自らの勢力を誇示し、政治的目標を達成しようとする行為

(例) **アメリカ同時多発テロ**(2001.9.11) → 反米的な宗教原理主義勢力**アルカーイダ**が起こした  
**イスラーム国(IS)によるテロ行為**(2015 パリ同時多発テロなど) → イスラームスンニ派の過激派組織